産業への貢献

江戸時代になると、谷村藩（やむらはん）の秋元氏の殖産政策により、郡内各地で織物生産が盛んに行われました。つくられた織物製品は「郡内織」と呼ばれる一種のブランドとなり、主に人口が急増する江戸で重宝され、江戸時代中期以降は京や大坂まで運ばれました。

そのため、養蚕は周辺の主産業の一つになりましたが、中期以降は生糸の生産量が追いつかず、他領からの買い入れも行っていました。また、上野原宿⑦は郡内唯一の市を持つ商業の要地であり、織物製品が多く取引されました。上野原宿を訪れた絵師歌川広重は「筬（おさ）音響く町（注：筬とは織機の部品）」と書き残し、織物業が盛んな町だったことを表しています。

こうした織物製品や生糸は甲州街道を通って運ばれ、地域の産業を支える根幹でした。

文化交流

甲州街道は葛飾北斎や歌川広重、松尾芭蕉、市川団十郎、市川海老蔵など、多くの文化人が旅をしています。彼らは往来の途中、絵画や俳句、歌、道中日記などを残しました。甲府では歌舞伎公演や道祖神祭りの幕絵作成など、江戸との文化交流に果たした役割は大きいものでした。

郡内織に使われた織機
（大月市郷土資料館蔵）

富士山へ向かった江戸の人々

江戸時代後期には、富士山を信仰する「富士講」が盛んになりました。これらの人々は江戸を出発して甲州街道から富士山の登拝へ向かいました。

大月市富浜町宮谷の精進場㊵は、ここで初めて富士から流れ出る桂川に甲州街道が接したことから、身を清めた場所でした。甲州街道周辺や富士山へむかう道中㊸にも、多くの石造物が残されています。また、上野原市日野には富士塚⑮が残っており、富士講にとって甲州街道が非常に重要だったことがうかがえます。

㊸大月追分富士講道標

㊵精進場

⑮日野の富士塚